HCニューズレター
No.8
Human Care News Letter
2007年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会

文化とヒューマン・ケア

第8回大会報告

神戸女学院大学人間科学部　島井　哲志

第8回日本ヒューマン・ケア心理学会を、2006年9月6日・7日の二日間において、神戸女学院大学で開催させていただきました。残暑が厳しい中、みなさまには丘の上の会場までお越しいただき、大会にご参加いただき、こころより御礼申し上げます。

今回の第8回大会では、文化とヒューマン・ケアという視点から、特別講演と教育講演のお二方の先生にお話いただきました。特別講演では、ヴァージニア大学の大石繁宏先生に「文化とWell-being」と題して、ご講演をいただきました。本学会の目指す、ヒューマン・ケアを通じた人間の健康及び福祉の向上においても、well-beingは重要なテーマであり、日本人のwell-beingを文化的な観点から考えるという貴重な内容についてお話いただきました。また、教育講演としては、神戸女学院大学文学部英文学科の長尾ひろみ先生に「医療通訳者の役割と現状」と題して、日本の中で生活する外国人が増加する中での医療場面での通訳の問題点とその展望についてお話していただきました。

シンポジウムでは、初心に戻り「看護と心理学の連携」という題で、香川大学医学部看護学科の当目雅代先生と大阪人間科学大学の山田冨美雄先生にご企画をいただきました。多くの参加者の方から、看護と心理学に関する現状や今後の課題についての意見があり、活発な議論が展開されました。

研修会では、あだち健康行動学研究所の足達淑子先生による、「健康日本21がめざすメンタルヘルスとしての『行動療法による睡眠習慣改善』」という極めて実践的で効果的な手法について研修が行われました。

研究発表は、口頭発表9題、ポスター発表19題と数としては多くなかったものの、若い世代の大学院生の方から研究・実践のベテランの先生方まで、さまざまな参加者による発表・議論が行われ、充実した意見の交流が行われていたと思います。

最後に、準備についても運営についても、何かと不行き届きの面もあったとか思います。それにもかかわらず、暖かく対応していただきました参加者の方々に、心よりお礼を申し上げます。また、大会の準備運営にあたりましては、学会本部事務局の関係者の先生方に、大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

特別講演

「文化とWell-being」

ヴァージニア大学心理学部　大石繁宏

日時　9月6日　13時～14時10分

近年、ポジティブ心理学の動向にも関連して、Well-beingの研究が世界的広がりをみせているが、そこには欧米の概念を無批判に導入した研究も多い。そこで、本講演では、Well-beingの概念を文化的、歴史的見地から検討し、Well-beingの概念とその歴史的変遷、文化差についてお話させていただいた。また、これまでの代表的なWell-being研究を紹介し、今後の日本でのWell-being研究の進展に何が必要なのかを考察した。本学会の理念にも関連したWell-beingについて参加者の先生方からの貴重なご意見をいただき、今後の発展が期待された。



講演：大石先生

教育講演

「医療通訳者の役割と現状」

神戸女学院大学文学部　長尾ひろみ

日時　9月6日　15時30分～16時30分

日本の社会に同化し生きてゆく外国人が急増する中、その人たちの言葉のバリアによる差別をなくすために通訳者が存在する。しかし、現状では彼らのライフラインである医療通訳は、公的な立場と正当な報酬で保障されないボランティアに頼っている。そのため、医師、看護師、ソーシャルワーカー、ケースワーカー、カウンセラーの業務にまで通訳者が介入するケースもある。

本講演では、メルボルン事件における司法通訳の恐ろしさを例に出しながら、医療通訳者の役割、職業倫理の確認と、通訳者を使う側の心得などをお話させていただいた。フロアの先生方から、制度に関するご意見や社会的な意味での期待と関心を寄せていただいた。



講演：長尾先生

シンポジウム

「看護と心理学の連携 ―看護学の立場から―」

香川大学医学部看護学科　当目雅代
大阪人間科学大学　山田冨美雄

日時　9月6日　10時～12時

社会の複雑化、高度医療における医療システムの変化に応じて、看護と心理は連携を模索しなくてはならない。このような中で、病む人の心を理解し、援助するには看護師だけでは限界を感じるところでもある。

そこで、本シンポジウムでは、看護と心理が今後どのように連携していけばよいか、あるいは必要とされているかを考えるため



シンポジウム

に企画を行った。津田茂子先生(呉大学)からは、小児看護学の立場からお話いただき、呉 小玉先生(園田学園女子大学)には、国際看護学の立場から話題提供いただいた。また、藪下八重先生(和歌山県立医科大学)には、慢性疾患専門看護師の立場から事例報告をいただき、さらに網島ひづる先生(県立広島大学)には癌看護学の立場からお話いただいた。これらの貴重な話題提供を受けて、指定討論として、木村登紀子先生(淑徳大学)からご意見をいただいた。フロアを含めた活発な議論が行われ、看護と心理学の連携が叫ばれた。

研修会

「健康日本21がめざすメンタルヘルスとしての『行動療法による睡眠習慣改善』」

あだち健康行動学研究所　足達淑子

日時　9月7日　13時～15時

健康日本21では、睡眠を心身の健康に重要な習慣と位置づけ、改善目標を設定している。「慢性の不眠」は、眠ろうとする努力が逆効果となり不適切な生活習慣が影響している。この慢性不眠に対して、習慣や行動を変える行動療法は睡眠薬と等しいかそれ以上に効果的であることが、主に欧米での研究から明らかとなり、副作用がなく効果が持続するという大きな利点を有している。

本研修会では、筆者が研究開発し、効果を実証してきた指導者用教材や一般用教材『ぐっすり眠る―不眠を克服する習慣改善法』『赤ちゃん　夜しっかり眠って』を用いて、不眠の行動療法の基本から実践法までを紹介した。そして、実際に参加者が患者指導に役立つための実践的な方法の習得を目指した。



～私の研究の視点～

患者の病気認知にアプローチする

桐蔭横浜大学工学部准教授　片山富美代

現在、筆者は透析患者を中心に、慢性疾患患者の病気認知に関する研究を行っている。この研究テーマに至る背景には、自らの病気療養の体験や看護師としての経験が大きな影響を与えている。これらの経験を通して、病者は一人一人が独自の病気イメージを持ちながら闘病生活を送っているのではないか、そうした病気イメージの有り様がその個人の闘病生活あるいは病気対処を規定しているのではないかという印象をかねがね抱いてきたのである。

医療者は、患者の病気を治し、健康な生活が送れるように援助する存在であることはいうまでもない。特に慢性疾患においては、如何に病気を自己管理しながら適切な食事・運動・休息などを取るかについてのセルフケアを指導することになる。しかしながら、このような管理指導はあくまでも医療者の求めるセルフケアであって、患者自身のイメージするセルフケアとの間にはかなりの乖離があるかも知れない。つまり、医療者は暗黙のうちに医療が期待する患者役割行動を押し付けている可能性がある。慢性疾患においては、しばしば患者のセルフケア行動の維持形成が困難であることが問題視されるが、その解決のためには、背後にある彼らの病気認知のユニークさに踏み込む必要性があるのではないだろうか。仮に病名は同じであったとしても、患者一人一人が体験している病気は他の誰の病気とも同じではない。自分の思う・感じている病気、自分と病気との関係はその人だけのものである。

患者が本来的な意味でのセルフケアを実現するためには、患者自身が自らの病気をどのように捉えているのかを医療者として知ることが必要である。そうでなければ、自身の病気に対するイメージ(病気表象)が曖昧な患者に通常通りの管理指導を行ったとしても、病気の意味づけが曖昧な分だけ、感情や行動や認知との間が乖離している患者は、相変わらず受け身的なセルフケアの域を脱出することは困難なのではないだろうか。患者が望む健康回復行動を実現するという意味からも、医療者として患者一人一人の病気表象を知ることは、ヒューマン・ケア研究として重要な課題ではないかと考えている。

日本ヒューマン・ケア心理学会第9回大会のお知らせ

日程…2007年9月8日(土)・9日(日)
会場…名古屋市立大学山の畑キャンパス(人文社会学部棟)
第9回大会準備委員長…後藤宗理(名古屋市立大学人間文化研究科)

1. メインテーマ…「生涯発達とヒューマン・ケア」
2. 講演　(1)特別講演「高齢者とヒューマン・ケア」(仮題)
　演者(交渉中)
　(2)教育講演「アタッチメントの発達について」(仮題)
　数井みゆき氏(茨城大学教育学部教授)
3. シンポジウム「子どもの発達とヒューマン・ケア」(仮題)
　テーマとシンポジスト
　「病児の住環境としての病棟づくりの視点から」(仮)
　鈴木賢一氏(名古屋市立大学芸術工学研究科教授)
　「チャイルド・ライフ・スペシャリストの視点から」(仮)
　佐々木美和氏(名古屋大学医学部附属病院・CLS)
　「小児看護学の視点から」
　田崎あゆみ氏(あいち小児保健医療総合センター・専門看護師)
4. 研修会
5. 研究発表
　研究発表申込みの締め切りは5月31日(木)必着、抄録原稿の締め切りは6月29日(金)とします。(なお、大会抄録原稿は、A4用紙2ページを予定しています。)
6. 連絡先／〒467-8501　名古屋市瑞穂区瑞穂町山の畑1
　名古屋市立大学人文社会学部　後藤研究室内
　電話・FAX／052-872-5157
　大会専用アドレス email:humancare9@yahoo.co.jp

※ 予備的な研究やさまざまな実践などについてもご報告していただき、活発にディスカッションする機会になればと考えております。多くの皆様の発表申し込みとご参加をお待ちしております。
※ 大会行事などの詳細は大会通信にてお知らせします。

「ヒューマン・ケア研究」第8号 投稿論文募集

編集部では会員の方々からの「投稿論文」を募集しております。同封の編集規定及び執筆要項に従った原稿を本学会編集事務局宛に2007年5月31日(木)までにお送り下さい。

送付先
〒960-1295　福島市光が丘1
福島県立医科大学看護学部心理学研究室内
日本ヒューマン・ケア心理学会編集事務局

web担当からのお知らせ

この度、「ヒューマン・ケア研究」既刊号(2000～2006)に掲載の論文をPDF化し、学会ホームページからダウンロードできるようにしました。閲覧資格は会員のみとなっていますので、次のIDとパスワードでログインしてください。

ID:HC@kaiin
PW:HC2007-001　(大文字、小文字は区別します。)

編集後記

今年は暖冬のため、例年よりも早く桜がほころびはじめています。毎年、桜が花開く前には会員の皆様にHCニューズレターをお送りしようと思っているのですが、8号は桜に追い越されてしまいそうです。会員の皆様には、さらに学会の発展のためにご協力下さいますよう、お願い申し上げます。

(学会広報委員会・ニューズレター担当　小玉正博)

●学会へのお問い合わせ、連絡は左記の事務局にお願いします。
〒113-0033
東京都文京区本郷2-38-14　TKビル5F　プライムアソシエイツ気付
日本ヒューマン・ケア心理学会 humancarepsy@primeassociates.jp
Tel／03-5805-0527　Fax／03-3812-5187